

三宝院開創九百年を迎えて

新年を迎える楽しみは、過去から未来へと続くときめきを覚えるひとときです。新年を言祝ぐ行事の中におのずと身の引き締まる思いでいっぱいです。

平成二十七年新春を皆様ご平安にお迎えになられましたこと、心よりお祝い申し上げます。本年は、三宝院開創九百年の年に当たります。すでに、三宝院庭園の修復、純浄観の修理、枕流亭、松月亭、新居間各お茶室の改修と記念事業も完了し、十一月二十三日の開創法要の準備を整えております。共々に、「祖山帰一」と「法流顕彰」の真心を結集して参りたいと思います。

平安時代、大きな時代背景を受ける中、「祈り」を中心として醍醐寺は開創されました。都が京都に遷都され、羅生門を中心に東寺と西寺が建立され、その後、都を取り囲むように寺院が建立されました。大覚寺、仁和寺などもその一環として官立的な寺院として開かれました。しかし醍醐寺は、これらの寺院とちがいで、聖宝理源大師が心に描いた「祈りの世界」のもと、私寺として開創されました。聖宝理源大師は、東大寺で出家し三論、法相、華嚴を修めそして師僧である真雅和上を通して弘法大師を深く思慕し、無量寿法を受法され、真言密教の修行に励まれました。このことを中心に、東大寺東南院を開創し、三論教学の中心寺院とし、真言密教の伝承寺院とすること、代々の院主はご自身の門葉から務める事を決められました。是の流れから醍醐寺は、開創より百年、十代の間座主は東大寺に深い関係を持つ方が務められました。十一代からは、天皇家、および村上源氏にご縁深い方が座主を勤められました。そのおひとり、第十四代勝覚座主によって永久三（一一一五）年十一月二十五日に三宝院は開創されました。勝覚座主の師匠に当たる定賢、義範、範俊に師事されたことからこの三師の法脈を統一し三宝院流とし、座主住坊も三宝院と定められました。このことから三宝院は、法流の本拠として灌頂院を中心として、礼堂、経蔵、宝蔵などのいわゆる仏道部分と、寢殿、護摩堂、持仏堂、湯屋などの住房部分から構成されていきました。三宝院勝覚座主の法流は、定海座主に引き継がれ、以後、三宝院流、理性院流、金剛王院流の醍醐三流の中でも、三宝院は中核的な位置を占め続けました。三宝院は、住房とし、法流とともに伝承され、醍醐寺座主が兼務し、本坊としての役割を担ってききました。

時の流れの中で、政治権力と密接な関係をもつ座主も現れ、大きな力を持ち幕政に深く関与し、將軍門跡などと称された方もおられました。応仁、文永の乱で殿舎は灰燼となりました。三宝院が現在の姿に復興したのは第八十代義演座主の時に、秀吉の浄心により寺観の整備がなされました。奈良の興福寺に集う修験道の修行者を中心に、三宝院門跡を修験法頭とし、当山派修験道の法流を明確に位置付けたのもこの時期です。このことは、江戸時代より、醍醐寺護持伝承の為に大きな力となり続けている。

思えば、勝覚座主が、灌頂院を中心に三宝院を建立し、法流の整備をなされ、三宝院憲深方洞泉相承を現在にもたらし、また、当山派修験は恵印法流を伝承し、この二つの法流は醍醐寺不可欠の二大要素となり現在に伝承されています。加えて、秀吉により催された「醍醐の花見」は、今なお、語り継がれ、世人の心を潤し、訪れる人は三宝院庭園に心を和ませる。

醍醐寺千百三十九年の流れの中で三宝院の存在がその中心部をなしている。その功は、世界文化遺産に登録され、伝承されている文化財は、国宝六万九千余点、重文六千余点の大きな社会評価を受けています。これを思う時に、先師、醍醐寺に止宿した多くの僧侶の浄行の結集であると深く感謝するものであります。この浄行に伝える道とし、醍醐寺一山は一本一草、文化財であり、その文化財は、生かされてこそ文化財であるということを中心に秘め、一步一步着実に前進していくものであります。